

これからの岩手

岩手県立久慈高等学校 中谷恭平

私が卒業した洋野町立中野中学校の今年の新入学生はわずか9人だったそうだ。少子高齢化の話題が取り上げられる機会は多いものの、今までは正直実感することはあまりなかったが、身近な学校の児童数の現状を知り、その深刻さを実感した。岩手県は、2000年以降、出生率低下による自然減と社会減の2つの要因による本格的な人口減少期に入ったそうだ。単純に考えると若い世代の多くはキラキラした都会に憧れるだろう。若い世代が県外に出るタイミングは、高校卒業後、大学進学や就職をする時だ。人によってはそのまま地元に戻ることがなくなるだろう。こうしたことを踏まえ、私が将来の進路として考えている保健医療の側面から現状の課題を考えて、私にできることや地域のことを考えてみた。

岩手県は広大な面積を有している。私の住む沿岸部の町洋野町も、自然に恵まれ、復興道路の整備もいたるところで目にし、便利になりそうな気配を感じる。しかし、それは車社会だけを前提とした便利さである。公共の交通機関の現状は、町内のみを運行するコミュニティバスと鉄道があるだけだ。しかも本数が少ない。では、歩いていける近所に商店街や病院があるかといえば、それもない。自家用車がなければかなり不便である。高齢の方や車の免許がない方は、将来的にこの地でどのように過ごしていけば良いのか。ネガティブに考えるときりがないが、同じような地域は県内に多いだろう。しかし、普段祖母の話聞いていて感じるのは、「不便だけど、住み慣れた地域に住み続けたい」という地域に住む人々の思いだ。そこで、10年後に岩手の人々が幸福に暮らすためには、安心して暮らせる地域社会の実現が課題だと考える。

私は、過疎化している地方をハード面に頼らないで活性化するためには、地域の福祉を充実させ、住民が生き生きしていることが大切だと考える。私は、将来保健師の資格を取得し、地域に貢献することを目指している。過疎地域の保健師の役割として、過疎地域だからこそ、より身近なところで広く地域の方々との関わりを持っていくことが必要だと考える。例えば、学区ごとに地域の学校内に保健師がいるセンターを設置するなどの対策も考えてみたらよいのではないだろうか。その他の職種と共同して小さな単位で赤ちゃんから子育て、高齢者まで安心して暮せるような地域づくりを規制の枠組みにとらわれず実践できるようになればよい。

また、「住民同士の支え合いの仕組みづくり」も重要な課題である。1つの例だが、私の祖母は地域の介護サロンに出かけている。祖母は普段も元気だが、人とのつながりでもっと元気になるという。また、祖母は張り切ってパークゴルフに通っている。その時、やや遠いところにあるゴルフ場に近所の人が車で連れて行ってくれる。こうしたことが必要なのだと思う。高齢社会というが、高齢者の中にも元気な方はたくさんいる。少しの手助けによってこうした方々の活躍の場がたくさんできれば、さまざまな可能性が生まれる。たとえば、高齢者の活動のサポートや、高齢者同士の買い物協力、子供の見守りや近所へ

の送迎など、サポートする側とされる側双方にメリットのある活動ができそうだ。その際、遠慮や負担が生じないような簡単なルールを作れば、そのような活動が実現できる。その簡単で分かりやすいルール作りを、若い世代が中心に行って、自分たちで幸福に暮せる地域づくりをしていければ、一度県外に出た若者も将来的には岩手に戻ろうと考えるようになるだろう。

岩手は自然豊かな暮らしができる素晴らしい環境を持っている。よって、先に述べたような地域のつながりを特徴にした福祉が充実した岩手県にしていければ、県外への人口流出も抑えられ、逆に県外からの移住者も増えていくはずだ。私はそのような岩手を作ることに貢献できるように、今からしっかりと学び、人とのつながりを作っていきたい。